

14. あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地には行って、それを占領し、そこに住むようになったとき、あなたが、「回りのすべての国々と同じく、私も自分の上に王を立てたい。」と言うなら、
15. あなたの神、主の選ぶ者を、必ず、あなたの上に王として立てなければならない。あなたの同胞の中から、あなたの上に王を立てなければならない。同胞でない外国の人を、あなたの上に立てることはできない。
16. 王は、自分のために決して馬を多くふやしてはならない。馬をふやすためだといって民をエジプトに帰らせてはならない。「二度とこの道を帰ってはならない。」と主はあなたがたに言われた。
17. 多くの妻を持つてはならない。心をそらせてはならない。自分のために金銀を非常に多くふやしてはならない。
18. 彼がその王国の王座に着くようになったなら、レビ人の祭司たちの前のものから、自分のために、このみおしえを書き写して、
19. 自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。それは、彼の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行なうことを学ぶためである。
20. それは、王の心が自分の同胞の上に高ぶることがないため、また命令から、右にも左にもそれることがなく、彼とその子孫とがイスラエルのうちで、長くその王国を治めることができるためである。

説教

申命記 17 章後半は国王の役割について教えます。これは、17 章前半の裁判、さらには 16 章の祭りの忠実な実行の延長として記されています。

「あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地には行って、それを占領し、そこに住むようになったとき、あなたが、『回りのすべての国々と同じく、私も自分の上に王を立てたい。』と言うなら」（14）と言われるように、この時は王制ではありません。モーセひとりが王と祭司と預言者を兼ねたような指導者としてイスラエルを指導していました。でも、これからカナンに入ってそこで定住するようになると、イスラエルでも王政を採用したいという意見が出てくるのが予想されます。それで、その際にはどうすべきかが教えられます。

そもそも「王政」は神から出たものではありません。「あなたが、『回りのすべての国々と同じく、私も自分の上に王を立てたい。』と言うなら」とあるように、「王政」の要求はあくまでイスラエルの民から出たものであり、しかも近隣諸国がやっているのを羨んでそれを自分たちにもと願ったものです。つまり、「王政」そのものはこの世で一般に行われている、いわば世俗的な制度で、しかもそれを願う民の動機も全くの世俗的なものだったのです。でも、神はそれにもかかわらずその採用を認めます。神から出たものではなく、全くの世俗的な制度でありながらも、神は民の要求を容認なされたのです。本質的にイスラエルは神ご自身の国家です。人ではなく神がこれを統治しなければなりません。神が直接統治する神政国家なのです。

人が人を支配する「王政」のルーツは、あのバベルの支配者ニムロデです。それは、神が人々を統治する仕組みとは大違いの、人が人を支配する仕組みです。戦時下の神社参拝強制のように、そこでは神礼拝もまた人が人を支配するための統治手段として利用されます。権力を誇示するために地上で最も高いバベルの塔が建てられ奴隷統治が促進されました。

こうした「王政」の問題点を踏まえ、王を立てる場合にはこうせよとの要求がなされます。すなわち、世俗的な「王政」を容認したのはしたのですが、そこには根本的な問題があるため、イスラエルではこの世で行われている「王政」に修正を加えて実行せよというわけです。

そこで、まずは、王として立てる人物の資格が教えられます。「あなたの神、主の選ぶ者を、必ず、あなたの上に王として立てなければならない。あなたの同胞の中から、あなたの上に王を立てなければならない。同胞でない外国の人を、あなたの上に立てることはできない。」(15) これによると、イスラエルの王となる者は必ず「主の選ぶ者」でなければなりません。具体的には「あなたの同胞の中から、あなたの上に王を立てなければならない」と言われます。それで、「同胞でない外国の人」は王になることができませんでした。これは、外国人を王に立てた場合、外国人の王がその権力を利用して自分の国の偶像宗教を持ち込んで普及させる危険性が大きいと理解できます。

続いて、王がしてはならない三つのことが教えられます。

その最初は「馬を多く増やすこと」です。「王は、自分のために決して馬を多くふやしてはならない。馬をふやすためだといって民をエジプトに帰らせてはならない。『二度とこの道を帰ってはならない。』と主はあなたがたに言われた。」(16) 「馬」はここでは軍馬のことです。戦闘機や爆弾もないこの時代、軍馬による騎兵と戦車はそのままその国の軍事力を表していました。つまり、ここでは、王がいたずらに軍備を増強してはならないと教えられているのです。軍備を増強し、それに頼り、ついには傲り高ぶることがないためです。一国の安全は、何より神により頼まなければなりません。その後の歴史を見ると、イスラエルは、神に信頼して神に聞き従う時には安泰でしたが、そうでない時には外敵に侵略されて酷い目に遭いました。国家の平和はただ神にかかっているのです。それで、詩篇にはこうあります。「軍馬も勝利の頼みにはならない。その大きな力も救いにならない。」(詩篇 33:17) 箴言にもこう言われています。「馬は戦いの日のために備えられる。しかし救いは主による。」(箴言 21:31) 国家の安全を一手に背負う国王は、神により頼まなければなりません。そして神に聞き従わなければなりません。それなのに、神に信頼するのをやめ、馬を増やして軍備を増強すれば、それで国家が安泰になると考えるのは誤りです。

史上最強の軍隊を誇るアメリカ帝国は、今や世界中で戦争を仕掛けて不安を撒き散らしています。軍事力による平和の実現という発想は、元をたどれば、カインの末裔トバル・カインとレメクに遡ります(創世記 4:22-24)。その本質は、外敵の攻撃に対する「77倍の復讐」という威嚇と脅迫の上に成り立つ平和です。そして、この世の国々は軍馬を増やして国家を守ろうとします。彼らが脱出してきたエジプトには世界最強の軍隊がありました。馬をたくさん持っていました。でも、神の民イスラエルは決してそれを真似てはなりません。「馬」「武力」が国を守るのではなく、神が国を守るからです。このことは国を統治する王が誰よりも肝に銘じておかなければならないことです。

当時最強の軍隊を持つ軍事大国エジプトから救い出された神の民イスラエルは、かつて奴隷であったエジプトの道に二度と後戻りしてはなりません。エジプトにあこがれて彼らに倣うことは許されません。軍馬を増やすことは「自分のため」と言われています。それはあくまで為政者の不信仰と自己満足のためであって、少しも「神の人のため」にはならないのでした。

王がしてはならない二つ目のことは、「多くの妻を持つてはならない」です。栄華を極めたソロモン王は言いました。「私は男女の歌うたいをつくり、人の子らの快樂である多くのそばめを手に入れた。」(伝道者の書 2:8) 「多くのそばめ」を持てば、自分の欲しいまま、性的な快樂を享受できます。同時に「多くのそばめ」を囲って多くの子孫を残すことができるという権力者の力を誇示することにもなります。また、政略結婚で近隣諸国との関係

作りのために外国の王の娘をめとる場合もあります。そのため国王が「多くの妻を持つ」ことは、当時、他の国では普通に行われていたことでした。

しかし、神の民イスラエルの国王にはこれが禁じられます。政略結婚で外国人の妻をめとることは、外国の神々を王宮と国内に持ち込むことになるからです。この点、七百人の妻と三百人のそばめのいたソロモン王は失敗します。外国人の妻たちが持ち込んだ偶像宗教に影響されて、晩年ソロモン自身も偶像崇拜の罪を犯すようになります（I列王 11:1-9）。また、アハブ王はシドン人の王の娘イゼベルをめとった結果、イゼベルが持ち込んだバアル崇拜とアシェラ崇拜とがイスラエル国内に蔓延し、神に呪われて三年も干ばつになりました（I列王 16:29-18:46）。

王がしてはならない三つ目のことは、「自分のために金銀を非常に多く増やしてはならない」です（17）。ここでもまた「自分のために」と付け加えられます。権力を手にすれば、その結果として利得も手にします。どうすれば国家が平和になるかということより、どうすれば自分が利権で私腹を肥やすことができるか、それが国王の関心事となります。国民を虐げ戦争を起こせば儲かるならば、そうします。でも、神の民イスラエルの王はそれではいけません。国王の一番の関心事は、何が私腹を肥やせるかではなく、何が神と人のためになるのか、であるべきからです。

こうして、イスラエルの王には、多くの馬、多くの妻、多くの金銀を持つことが禁じられました。これらは外国の王には許されていることですが、イスラエルでは許されません。そして、その代わりに聖書を読むことが命じられます。「彼がその王国の王座に着くようになったなら、レビ人の祭司たちの前のものから、自分のために、このみおしえを書き写して、自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。」（申命記 17:18-19）

「このみおしえ」とは律法のことです。もともとイスラエルでは神政政治が理想です。為政者は何より神のみこころを行わなければなりません。自分の欲望や人々の勝手な願いを満たすのが王のつとめではありません。王の本質的な責任は、ただ神のみこころを実現することだけです。そして、そのために王として立てられました。それで、神のみこころを啓示する律法を「自分の手もとに置き、一生の間これを読まなければならない」のでした。常に神のことばを読むことで「主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行う」ことを学びます（19）。そうして、「王の心が自分の同胞の上に高ぶる」ことなく、むしろ主の「命令から、右にも左にもそれることがなく、彼とその子孫とがイスラエルのうちで、長くその王国を治めることができる」ようになります。

王権と国家を堅く立てるのは金でも馬でもありません。神のことばが王権を確立し、国を確立させるのです。金と色と力は、神に背いたカインの末裔が築いた「町」「都市」を満たしていたものです。文明社会を象徴するものが、金と色と力です。金と色と力が、神を見えなくさせます。人しか見えません。人しか見えない中では、金と色と力を持っている者が支配者となります。カインの末裔は、金と色と力に満ちた文明社会の中で、神を見失い、高慢を膨らませて、最後は洪水で全滅してしまいます。そうならないよう、聖書を読まなければなりません。神のみこころを啓示する「このみおしえ」「律法」に聞き従わなければなりません。

神のことばが、人を罪と滅びから救い出し、生かします。神のことばに聞き従うよう、為政者のために祈り、彼らに神のことばを教えなければなりません。そして、ここに集う私たちもまた、日々みことばを読み、みことばに聞き従う生活をしましょう。